

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科

2018 年度

博士学位論文
(要約)

「保育ソーシャルワークの有用性に関する研究
ー食事場面に着目してー」

臨床福祉学専攻 小口 将典
学位記番号 甲第 15 号

論文名

「保育ソーシャルワークの有用性に関する研究

－食事場面に着目して－

論文要旨

研究の背景

戦後、経済大国を目指した歩みに伴う社会変動は、子どもの育ちの場である家庭にさまざまな形で波及している。例えば、産業構造の変化に伴う都市化、所得水準の向上などの社会・経済状況の変化、家庭内における女性の役割の変化、核家族化に伴う家族形態の変化、地域生活を営むなかでの近隣関係の希薄化、子どものあそび場の減少などが地域コミュニティの変化に影響を与えている。

子どもを育てる環境の変化に伴って、保育所は地域の子育て支援を担う機関として、その専門性を発揮することが求められている。1997（平成 9）年の児童福祉法の一部改正によって、保育所機能に「地域子育て支援」が加わり、2001（平成 13）年には、保育士の国家資格化によって「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者」（児童福祉法第 18 条の 4）と規定され、保護者への支援が明確に位置付けられた。さらに、2008（平成 12）年に改訂された保育所保育指針解説書には、「保育士が行う子育てに関する相談や助言など、子育て支援のため、保育士や他の専門性を有する職員が相応にソーシャルワーク機能を果たすことも必要であり、その機能は現状では主として保育士が担う」とされている。今日のように保育ニーズが多様化し、その課題が複雑さを増すなかで保育所にはソーシャルワークの機能を発揮することが求められている。

このような保育へのソーシャルワークの必要性が強調されるなかで、保育学あるいは社会福祉学の領域を中心に、保育ソーシャルワークに関する研究が 1990 年代の後半頃から取り込まれるようになってきた。しかし、これまでの保育とソーシャルワークを関連させた先行研究を概観すると、その主たる担い手、対象、実践の場、保育士の位置づけ、ソーシャルワーク機能などについて一貫性をもって論じられてはいない。保育ソーシャルワークとは何かという明確な位置づけが存在しないなかで、保育にソーシャルワークが必要であることが多方面から論じられているのが保育ソーシャルワーク研究の現状である。伊藤は、「保育ないし保育学という観点から、保育ソーシャルワークそれ自体の主体性・独自性のさらなる追求とともに、保育現場の現状や保育者の感覚にフィットした理論と実践モデルを提供していくこと」¹⁾ が求められるとしており、保育の基本原則を十全に踏まえた、

保育ソーシャルワークの理論と実践体系を構築していくことの必要性を指摘している。

保育ソーシャルワーク研究においては、保育所の特性および保育士の専門性を踏まえる必要がある。保育に関する専門的な知識を踏まえた保育士が、保護者との緊密な関係のもとに、子どもの生活と発達過程を踏まえ、保育の環境を通して行われる保護者支援に特性がある。したがって、ソーシャルワークを保育場面に適用して展開するという単純なものではなく、保育の原理や固有性を踏まえた理論、実践を構築することが求められているといえる。

保育所においてソーシャルワークを実践していく上で重要となるのは、子どもや保護者の生活全体をエコロジカルな視点で捉えることである。山縣が、ソーシャルワークの問題の見立て方として重要ことは、生活全体を視野に入れることであるが、この点において保育士のもつ視野は狭い傾向にあることを指摘する（山縣 2011：10）。保護者支援における主訴や問題の背景にある複雑な問題構造を理解するというアセスメントにおいて、保育士がソーシャルワークの知見を援用する意義の一つはここにあり、問題の見立てによって、その後の支援展開は変わると考えている。

研究目的

本研究では保育の特性と専門性を踏まえ、食事場面を用いた保育所におけるソーシャルワークの有用性を検討することにある。

「食事」への着目は、乳幼児期の食の営みは、身体的な栄養の摂取とともに、親子の愛情や親密さの相互伝達の場であり、子どもへのしつけの場としての機能を有している。毎日、家庭と保育所を行き来する子どもの生活のなかで、家庭での保護者とのかかわりやしつけ、体調や情緒に関しても保育所での子どもの姿に反映される。「食事」への着目は、子どもや保護者の置かれている家庭生活を具体的に理解し、保護者の主体的な問題解決に向けた現実的な支援を可能とするのではないかという仮説からである。

これまで、社会福祉学分野における食事に関する研究は、摂取量や嗜好、嚥下、肥満対策や高血圧予防のための栄養指導、母乳の推進など栄養の摂取に関するものが中心であった。保育学分野では2005（平成17）年に施行された食育基本法によって「保育所における食育指針」が示されたことにより、子どもの食育に関する研究が多くを占めている。本研究のように、ソーシャルワークの観点から保育所での保護者支援において食事場面を用いた研究はこれまでになく、ソーシャルワークの研究領域においても窪田や結城が高齢者の

在宅福祉、精神障害者の地域生活支援に取り組んでいるのみである^{3) 4)}。食事は、子どもの発達と家庭の生活において中核となる領域であり、保育におけるソーシャルワークにおいても、子どもと保護者の生活理解の促進、支援者と保護者との相互の支援関係の構築、子育て環境の変容を可能とする要素を含んでいるといえる。本研究では、子どもと保護者のウェルビーイングを高め、その主体的な問題解決と家庭環境を含めたエンパワメントを志向する支援を目指すものであり、保育ソーシャルワークという新しい学問領域から試みるものである。

さらに、本研究では保育所の特性を踏まえ、生活場面面接としての展開を提起する。生活場面面接は、「構造化されない面接」であり、近年では福祉サービス利用者の生活に寄り添う形で提供される面接方法として、ソーシャルワークの援助技術のなかで広まっている。保護者の子育てを中心とした相談にのる場合、子どもと保護者、そして保育士とが生活場面を共有し、保護者と環境との相互作用を把握できる場でのかかわりが重要になる。三者がともに共有できる場は、保育所における相談支援の特質であるともいえる。これまでの保育ソーシャルワークに関する先行研究において生活場面面接の有用性に触れられているものはない。本研究のような生活場面面接を用いることは、保育所という特性を生かしたソーシャルワークがよりいっそう発揮できるのではないかと考えた。

研究方法

本研究目的は、5つの研究から構成されている。

保育所にソーシャルワークが求められている背景にはどのような理由があるのかを、保護者支援において対応している内容および子育て家庭が抱えている生活課題について先行研究のレビューを通して整理を行った。さらに、保育ソーシャルワークにおける先行研究から、ケアワークとしての保育とソーシャルワークの関係について検討し、本研究における保育所におけるソーシャルワークの定義を示した（研究1）。

食事場面への着目に関しては、多様でかつ個別的な子育て状況をアセスメントするにあたって食事場面を用いることの有用性を関連する学問領域および社会福祉における食に関する先行研究を通して検討を行った（研究2）。

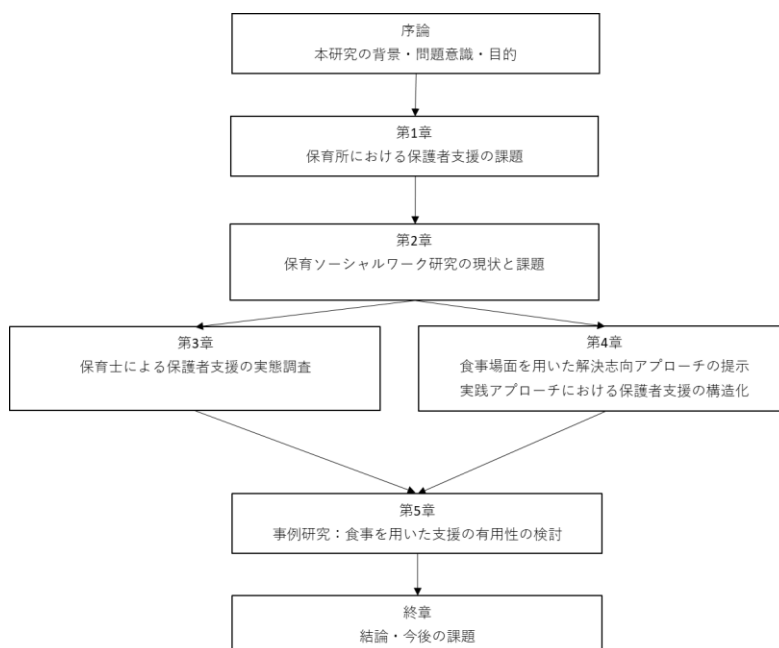
次に、仮説的に提示された内容について、大阪府内の保育所へのアンケート調査を通して、①保護者支援にて保育所および保育士が対応している問題の実態を明らかにし、②保育士が具体的な保育場面から子どもと保護者の家庭状況に関する情報をどのような視点で

認識しているのかを明らかにするなかで、食事場面に着目することの有用性を検討した(研究 3)。

さらに、アンケート調査の結果を踏まえ、解決志向アプローチの理論的枠組みを整理し、食事に関する面接シートを提示し、14名の保護者への調査を実施した。調査結果としての事例分析にあたっては、質的研究の手法の一つである木下(2003、2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach;以下、M-GTA)を用いて、食事場面を通して子育て家庭の生活を理解する支援者と保護者との相互の関わりのなかで、保護者が解決力を高めるプロセスを明らかにし、食事場面を用いた解決志向アプローチの機能・構造を検討した(研究 4)。

その後、M-GTAによって示された、支援の構造や動きをもとに、保育所におけるスーパービジョンを目的とした個別ケースの事例検討を行い、実践の効果を検証した(研究 5)。

本論文のフローチャート



論文の構成(目次)

序章 研究の背景と目的

第1節 保育所になぜソーシャルワークが求められるのか

第2節 保育ソーシャルワーク研究の課題

第3節 本研究の目的

第4節 研究方法

第5節 本論文の構成

第1章 保育所における保護者支援とソーシャルワーク

第1節 保育の特性を生かした保護者支援

- 1 保育所における保護者支援とその特性
- 2 保育所保育指針解説書におけるソーシャルワークの位置づけ

第2節 保育所保育士による保護者支援の今日的課題

- 1 保護者支援における支援の困難さ
- 2 多重問題への支援と保育士の視点

第3節 保育におけるソーシャルワーク

- 1 ソーシャルワークの定義と考え方
- 2 ケアワークとしての保育とソーシャルワークの関係

第2章 保育所におけるソーシャルワークと食事場面への着目

第1節 保育ソーシャルワークに関する研究動向

- 1 保育におけるソーシャルワークの位置づけ
- 2 保育ソーシャルワークをめぐる議論と推移
- 3 保育現場に浸透しない保育ソーシャルワークの課題

第2節 保育者支援における家庭での食事場面への着目

- 1 保護者支援において子どもの「食事」に着目することの有用性
- 2 家庭における食事場面の機能に関する研究動向
- 3 社会福祉学分野における食事場面を用いた面接に関する研究

第3節 食事場面を用いた保育所におけるソーシャルワーク実践にむけて・・・ 42

- 1 保育の特性を生かした生活場面面接
- 2 保護者支援における生活理解の重要性
- 3 保護者のエンパワメントを志向する支援

第3章 保育士による保護者支援の実態調査

第1節 調査の目的と方法

- 1 調査目的
- 2 調査方法
- 3 分析方法
- 4 倫理的配慮

第2節 結果

- 1 単純集計の結果
- 2 クロス集計の結果
- 3 自由記述の分析結果

第3節 調査結果からの考察

- 1 保育士養成カリキュラムの見直しと経験年数から見た課題
- 2 保育所において対応している保護者支援の内容
- 3 保育場面における保育士による情報収集の特性
- 4 アセスメントにおける食事場面の有用性

第4節 アンケート調査を通しての結論

第4章 食事場面を用いたソーシャルワークの実践アプローチ

第1節 食事場面を用いた保育所における解決志向アプローチの理論的枠組み

- 1 食事場面を用いたアプローチの保護者支援への導入
- 2 解決志向アプローチとは
- 3 保育場面における解決志向アプローチの有用性

第2節 食事場面を用いた解決志向アプローチの枠組み

- 1 解決志向アプローチの基本的な流れ
- 2 保育所における解決志向アプローチの展開
- 3 食事場面を用いた解決志向アプローチ

第3節 食事場面に関する保護者へのインタビュー調査

- 1 インタビュー調査の目的
- 2 調査方法
- 3 インタビュー調査の実態
- 4 分析方法

第4節 インタビュー調査の結果

- 1 基礎的な情報項目
- 2 M-GTAによる分析

第5節 M-GTA分析からの考察

- 1 夕食状況からみる子育て家庭の現状
- 2 子育て以外に関する生活の困難

3 子どもに関する不安・悩み

4 面接を通しての保護者の変化

第6節 食事場面を用いた解決志向アプローチの特徴

- 1 インタビュー調査を受けての感想
- 2 実践のモデル化に向けた考察と結論

第5章 事例研究

第1節 事例研究の概要

- 1 目的
- 2 方法
- 3 倫理的配慮

第2節 事例検討

- 1 事例① 家庭でのかかわりが乏しい事例
- 2 事例② 育児に自信がない保護者の事例
- 3 事例③ 生活習慣の確立に向けた支援事例
- 4 事例④ 少食で成長がゆっくりの事例

第3節 食事場面を用いた解決志向アプローチの評価

- 1 保育所におけるエンパワメントを志向する支援
- 2 食事場面からの情報収集機能

終章 食事場面を用いた保育におけるソーシャルワーク実践

第1節 保育所におけるソーシャルワークの必要性

第2節 食事場면을語るということ

第3節 保育所における食事場面を用いたソーシャルワーク実践の有用性

論文の梗概

第1章では、保育所にソーシャルワークが求められるようになってきた背景には、子育てを取り巻く環境の変化が関係している。保育所が保護者支援において対応している内容を基に、子育て家庭が抱えている生活問題の構造を整理し、保育所での支援を困難にしている要因を明らかにする。また、保育指針・保育指針解説書に示されている保護者支援の内容を整理し、保育所にはどのようなソーシャルワーク機能が求められているのかを検討する。そのなかで、ケアワークとしての保育とソーシャルワークとの関係について考察し、

本研究における両者の関係を示した。

第2章は、主として保育ソーシャルワークに関する先行研究の到達点を検証する。保育ソーシャルワーク研究を概観するなかで、これまで行われてきた保育ソーシャルワーク研究の課題を整理した。さらに、保育所の特性と保育士の専門性を踏まえた保育ソーシャルワークの実践について、ジェネラリスト・ソーシャルワークを基礎的な視点に置き、保護者の解決志向を高め、エンパワメントを志向する支援の在り方を検討している。さらに、食事に関する先行研究を通して、食事場面がもつ機能からソーシャルワークにおいて用いることの可能性を仮説的に提示した。

第3章では、保護者支援において保育所および保育士が対応している問題の内容を大阪府内の保育所へのアンケート調査を通して明らかにしている。さらに、保育ソーシャルワークの展開においては問題の見立て、いわゆるアセスメントが重要となる。実際に保育士が日々の保育場面において、子どもと保護者の家庭状況に関してどのような情報を得ているのかを調査結果から明らかにし、本研究が着目している食事場面の有用性を検討した。

第4章では、食事場面から生活を捉える視点について検討を行い、保育士と保護者との関係の相互性のなかで、エンパワメントを志向するアプローチの枠組みを提示している。さらに、保育士によるアプローチの事例をM-GTAを用いて分析し、食事場面を用いた実践アプローチの構造を明らかにした。

第5章では、保護者支援におけるスーパービジョンを目的とした事例検討を通して支援の有用性についての考察を行い、食事場面を用いた解決志向アプローチとしての有用性を検討している。

最後に、本研究のまとめとして、保育所におけるソーシャルワーク実践において家庭で食事場面に着目することの成果と今後の展望を示している。

本研究の結論

保育士が食事場面を通してさまざまな情報を得ていることが調査によって明らかにされた。これは、日常的な子どもとのかかわりのなかで保育の専門性を基盤に子どもと家庭での状況を理解する重要な場面であることいえる。

食事は、家族員が時間と空間を共有する場であり、毎日繰り返される生活行為であっても準備から後片付けまでには多くの時間を有し、各家庭の中核に位置する日常生活行為である。そして、その家族の作法や生活規範にもとづきながら、生命維持の場、親子の情緒

交流の場、家族と子育て場面を象徴する場面である。子どもとその保護者の支援を担う保育士は、その食事場面を丁寧に聞き取ることを通して、保護者の親としての意欲、生活する力を感じとることができる。保護者支援において、食事場面を用いることは、多様で個別的な子育て家庭の生活を理解し、保護者の育児と生活にまつわる感情（情緒）と生活上の事実（情報・出来事）とが同時にあわせて語られるという点で、アセスメントにおいて有効であるといえる。保護者が食事場面を語ることを通して、支援者には見えにくい家庭生活と子育てを、抵抗なく自らの言葉で保育士に向かって語ることを可能としており、保育士と保護者との関係が築きやすいという利点もある。

保育でのソーシャルワーク実践が、さまざまな状況に置かれながらも子育てに向き合う保護者の主体的な問題解決と回復ともいべき支援の在り方を考えるとき、保護者自らが自分自身の生活と子育てを積極的に、自らの声と言葉で語り、伝えることが大切である。さらに、積極的な意味づけのなかでそれを支援者に受け止められたとき、より子育てを自立（自律）的に営むことが可能となり、保護者の解決志向を高めていく。本研究のような面接それ自体が、支援過程として展開するという特徴をもつソーシャルワーク実践は保育所において重要であり、ここに保育士によるソーシャルワーク実践の核心があると考えられる。

本研究での試みは、ソーシャルワークを保育に適応させようとしてきたこれまでの保育ソーシャルワーク研究の流れに、保育の原理や固有性を踏まえ、保育現場や保育士が用いることのできるソーシャルワーク実践を提示するものである。今後、食事場面を用いた面接を洗練するために、特に保育士が支援に行き詰っているケースに応用できるようにしていきたい。

文献

- 1) 伊藤良高・香崎智郁代・水野典詞・三好明夫・宮崎由紀子（2012）『保育現場に親和性のある保育ソーシャルワークの理論と実践モデルに関する一考察』熊本学園大学紀要
- 2) 伊藤良高（2011）「保育ソーシャルワークの基礎理論」伊藤良高・永野典詞・中谷彪編『保育ソーシャルワークのフロンティア』晃洋書房
- 3) 窪田暁子（1989）『食事状況に関するアセスメント面接の生まれるまで－生活の実態調査と理解の方法としての臨床的面接－』生活問題研究
- 4) 結城俊哉（1998）『生活理解の方法－食卓から社会福祉援助実践への展開－』ドメス出版